

ある人生の記録

経済学者の夫、森嶋通夫を語る

第2回 泣く子と地頭には勝てない



森嶋瑤子略歴

もりしま ようこ：1930年神戸生まれ。東京女子大学数学科（旧制）卒業後、日立製作所中央研究所助手、大阪大学経済学部助手などを務める。1968年に家族とともに来英し、以後、英国在住。1984年、国際児童文庫協会（ICBA）を東京で創設したオーバル・ダン氏とロンドンで出会い、日本語の文庫活動を始め、ICBA UK支部を創設。以後、支部長を務める。

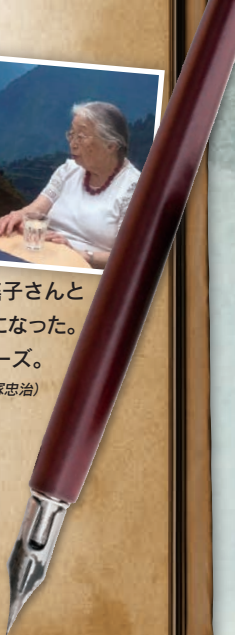
20世紀後半、世界的な経済学者として英国の名門大学で教授職を務められた森嶋通夫氏。私が森嶋さんを知ったのは学生時代、同氏の著書を読んだのがきっかけだった。毎日の忙しさに森嶋さんのことは記憶の彼方にあっただが、約2年前にあるレセプションで森嶋さんの奥様、瑤子さんと出会ったことから再び同氏の在りし日の活躍に思いを馳せるようになった。森嶋氏の人生の三角波を瑤子さんからお聞きする、全6回シリーズ。

（センターピープル代表取締役 飯塚忠治）

※三角波：時化した海で方向の違う二つ以上の波が重なってできる三角形の波で、船の舵が取れなくなる危険な状態を言う。

森嶋通夫略歴

もりしま みちお：1923年～2004年。大阪府生まれ。京都帝国大学経済学部経済学科在学中に徴兵。軍では暗号解読を担当した。戦後、京都大学助教授、大阪大学教授を経て1968年来英し、エセックス大学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の教授を歴任。ノーベル経済学賞の候補者とも目された世界的な数理経済学者。



飯塚 森嶋さんの幼少期のことはお聞きになっていますか。

瑤子さん そうですね、本人から聞いたというよりも森嶋の母親から、森嶋がどのようだったか聞きました。小さなときからどうも言い出したら聞かない性格だったらしく、両親はこの子の将来は一体どうなるのか危ぶんだと。でもこの性格が、森嶋の人生の土台だったようにも思います。一旦言い出したら聞かないというのは、聞き分けが良くないとかそのようなことではなく、森嶋の思うところから外れたときに、筋を通そうとするところにあるようでした。

飯塚 プリンシプル、ですね。あるところに軸足を置き、そこから離れない生き方をするのは誰にも簡単にできることではないのかもしれない。

瑤子さん 森嶋の軸は、森嶋が自伝で書いていますように、戦後すぐのことですが、「反皇国史観、反マルクス主義だからこそ出来る一種の正義感があり、それに反する事態に遭遇するとひるむことなく、明確な態度を取ってきたのである」というものです。具体的なことはこの後お話いたしますが、森嶋が夏目漱石の書いた本「野分」を例に取りながら、このように締めくくっています。「なぜ日本では正義感と物質的幸福が両立しないのに英国ではほどほどの両立可能であるのか」。このテーマが森嶋の人生であったのかもしれないね。

飯塚 プリンシプルを貫こうとすれば様々な壁に当たるとは思いますが、具体的なお話をぜひお聞かせいただきたいと思います。

瑤子さん 森嶋は、人間にとって一番大事なのはインテグリティ（誠実）を保つことだと言って、浪高（旧制浪速高等学校）時代の修身の時間のことを著書で紹介しています。先生が「君たちの中に生まれてから一度も嘘をついたことがない人がおりますか、いたら手を挙げなさい。もちろん皆シーン。「そうですね、誰もいないでしょう。嘘をつかないという簡単なことでも人間はなかなかできないものです」と追い討ちをかける。そしてそのあと、「なぜ正直でなければならないか、誠実とは何であるか」という話になる。こんな話があったタイミングで、浪高の入試収賄事件が朝日、毎日新聞のトップで大々的に報道されました。校内で大変な騒ぎとなったのはご想像いただけると思いますが、中でも森嶋にとってショッキングだったのは、例の修身の先生も収賄側の一人であったということのようでした。インテグリティのなかったこの先生は罷免処分になりましたが。

飯塚 良いことばかり言う人は眉唾ものということでしょうか。ところで中国でも少し生活されたご経験があるとか？

瑤子さん 森嶋の父親が中国で働いていましたので、中国に父を訪ねたというのが正しいと思います。森嶋は高校生になって神戸で生活をしていました。高校1年の夏休みに北京に住む父親を訪ねたとき、列車の中で起きたことが頭に焼き付いているらしく、自伝に書いていますからご紹介いたします。これも森嶋の生き方を表していると思いますので。「私は国際列車の三等車に乗っていた。当時日本人は三等車に乗るなど言われていたのだが……私の車輦には数人の日本兵監視兵が乗っていた。私が立っているのを見ると、

私に座れと言った。『いいです、これで』。『座れ、こいつを立たすのだ』と座っている中国人の一人を指差した。『いいです、僕は若いのですから』『いかん、日本人は座るのだ』。そして兵隊は中国人に立てと命令をした。命令された中国人はまごまごしていたが、兵隊は剣を抜き中国人を脅した。ほかにも似たようなことがあったが、いまだに忘れられない不愉快な思い出である。

飯塚 正義感が強く、差別を最も嫌った森嶋さんご自身の生き方を、昔のことを思い返しなが、臨場感を伴って表現されていますね。

瑤子さん 生き方としては、世間一般から見ると激しい方であったと言えるかもしれません。阪大のある教授は私に「泣く子と地頭と森嶋君には勝てまへん」と言われましたから。信念があり、それをずっと持ち続けられれば物事を成し遂げることができると信じていました。そして森嶋は、自伝の中であえて対立のあった人の実名を挙げ、なかなか難しい事柄を書いています。森嶋は人を「プリンシプルに沿って行動する人とそうでない人がいる」と明確に述べています。「いわゆる積極的な悪人や有徳の士が前者だが、そのほか多くの、普段は善人だが、気が弱いためいざいざときには道徳的に腰抜けになってしまう人」と。

飯塚 次回のお話は身を引き締めてお聞きします。

本コラムの過去記事は、下記アドレスでご参照いただけます
www.centrepeople.com/japanese/article